

はじめに

昭和17年（1942）12月31日、天理教教庁直属の研究機関として「天理教亜細亜文化研究所」が発足する。この研究機関が設立した経緯としては、第一に研究者の養成、第二に海外伝道の推進があり、これに時代的な要請が相俟って設立が具体化した。

研究所はその職制上、天理教教庁内に置かれたが、事務所や研究室は便宜上図書館内に置かれた。表面上は国家の要請に応える手段として、実質的には、天理教伝道の理念の確立と伝道の組織的・具体的方策を立てるための根本的な調査機関として設立された。

設立目的について「天理教亜細亜文化研究所規程」第二章第三条に、「本研究所ハ国家目的ニ即応シテ亜細亜ニ於ケル民族文化ヲ調査研究シ以テ本教ノ活動ニ寄与ス」とある。趣旨は、教庁の施策、企画などに関して諮問された事柄について調査研究し、天理教の伝道活動、とりわけ海外伝道に役立てようというものであった。総裁に就任した2代真柱は、翌18年2月24日に開かれた第1回所員会議において、「研究所も唯単なる研究機関ではなくして、海外伝道に関する後方の参謀機関として始めて生命があり、海外伝道の推進力として進まねばならぬ。」（「亜細亜文化研究所第一回所員会議に於ける御訓話」『管長御訓話集』第三巻）と述べている。

### 1. 「伝道学」について

日本の教団が伝道学という視点に立った研究をしようとした時、参考になったのは主にキリスト教の伝道論であり、伝道学であった。小松雄道は、『伝道学の研究 興亜伝道の理念』（櫻門出版部、昭和18年）の序文において、以下のように述べる。

布教、伝道ということは、宗教の存在と共に古く遡り得ることであり、殊に所謂創教的宗教に於ては、これは該宗教の生活力の発言として、意識的に努力もされ且つその努力をより効果的たらしめる為に実践上の方法等につき早くより反省、考究が重ねられて来ている。従って伝道の研究というものは事実古くより行われているのであるが、これが近代の科学的要求に照らされて、兎にかく「伝道学」としての主張をもち、構成をもつようになったのは最近のことである。（略）伝道問題に関心を有し、伝道の実相を深く広く究める為には前世紀より西洋に起っている「伝道学」の主張と体系を明らかにする必要を感じた。もとよりそれは「基督教的伝道学」であり、（略）、既に先鞭をつけたる彼らの主張を一度は聴き、これを検討して行かねばならぬ。

小松が参考にしたヨーセフ・シュミトリン（Joseph Schmidlin, 1876-1944）は、1911年に『宣教学雑誌』を創刊。国際宣教学研究の科学委員会委員長を務めた。彼は、伝道学は、伝道記録と伝道理論に分けられ、前者は伝道史と狭義の伝道記録、後者は伝道原理論と伝道方法論とで構成されるとした。また「伝道学とは、キリスト教の信仰弘布、異教徒改宗の過去から現在に通ずる事実的経過、並びにその理論的根拠と法則とを、批判的に、体系的に、認識し、探究し、叙述すること」とし、伝道の実践的経営の規定、規範（伝道理念）とを明らかにしていくことだとした。さらに、小松は、ショーメルス（Hilko

Wiardo Schomerus, 1897-1945、ドイツの福音派ルーテル派神学者、宣教師）の伝道学を取り上げている。彼は、（1）伝道弁証学（聖書の基礎づけ）、（2）伝道理論（＝伝道経営論：伝道の動機、機関、経営、手段、目標）、（3）伝道教育学、（4）伝道史、（5）伝道記録を伝道学の柱とした。

また、塚田博教は、「浄土真宗における伝道論」（『印度學佛教學研究』第四十七卷第二号、平成11年3月、pp.702-704）において、「伝道。この言葉を浄土真宗の聖教の中に見出す事は難しく、必然的にその内実を確固として断定する事も難しい。しかしながら、一般に宗教で使われる伝道がそのまま浄土真宗の教義に当て嵌まるかと言えば、これを容易に承認する事ができない。すなわち、伝道とはその宗教的真理に基づいて伝道者が民衆に教えを流布してゆく事である。故に、様々な宗旨・宗派により独自の布教法というものが開発されていった。」と述べる。

### 2. 丸川仁夫『伝道学概論』（1991年3月）

丸川仁夫は、小松が前述の著書執筆に際して助手のような立場にあった。その丸川が研究所に来て始めたことの一つに「伝道参考シリーズ」の発刊がある。丸川は自らの講義・講演を『伝道学概論』としてまとめ、そこで「第一章 伝道宗教と非伝道宗教、第二章 伝道宗教の成立と特色、第三章 伝道の組織的準備、第四章 伝道の在り方、第五章 現代社会における伝道、第六章 土着宗教との接触、第七章 土着化」が扱われた。丸川の伝道論は、キリスト教の伝道学の枠組みを利用して構成されていたが、伝道宗教と非伝道宗教という視点が明確に示され、天理教の伝道を考える時の始点になるように思われた。ここから、伝道宗教としての天理教、その特徴についての研究、その上での現代・現代人が求める救いを明確化する必要があるのではないか。

### 3. 現代の布教伝道の様相

天理教青年会本部が『布教の手引き—青年布教操典改訂版—』（天理教青年会本部、昭和57年6月）を編んでいるが、そこには、『「一日ひと言にをいがけ一身近なことからひのきしん」及び『第百母屋を若い力で満たそう』の合言葉を掲げて、『布教活動の推進』と『おやさへの伏せ込み』の二大方針のもと、（略）青年会員のにをいがけ活動に資すべく、天理青年教程第二十二号『青年布教操典』（昭和49年4月発行）に補筆改訂を加えて、『布教の手引き（青年布教操典改訂版）』を発行したとある。ここでは、教理と布教の方法とが示される。

他宗では、例えば、浄土真宗本願寺派総合研究所は「布教伝道の基礎」というページをホームページに設けている。ここでは、法話の基礎、課題と例話、布教上の作法、伝道のヒント、布教師インタビューの項目があり、伝道しようとする人々に伝えようとしている。

終わりに

デジタル社会とは、現代社会を象徴する言葉であるが、そういった中で、どのような救いが求められ、天理教の救いはそこにどのように関わっていけるのだろうか。天理教の伝道は、原典や『逸話篇』で教えられる救いの実践である。その上で、たとえば相談・話相手としてAIの存在感が増す中、どのような伝道論を展開すべきかが喫緊の課題である。